

さとう しょうご  
Interview 佐藤詳悟 先輩

ぶっ飛んだ才能を「つなぐ」黒幕。高校時代も今も、変わらぬポジション。



profile

株式会社 FIREBUG 代表取締役 COO。2001年 明治高校卒(サッカー部)。明大(政経)卒業後、吉本興業でナインティナイン、ロンドンブーツ1号2号などのマネージャーを経験。

2015年に吉本興業を離れ、クリエイターのプロデューサーや、クリエイター同士を「つなぐ」数々の事業を、矢継ぎ早に展開。

オトナの過程



Vol.4

2019年10月1日  
総明会広報委員会  
『M』編集部会

ODAIRA ASAKO  
小平朝子 先生の

ピラミッド

転職が特別ではなく、社会に出てから定年まで、1つの職場で働く、という状況も、変わりつつあります。常に新しい環境に挑戦し続けてきた、本校国語科教員の小平先生に、お話を聞きました。



「偶然に流されて、生きていくだけなんですけどね」。笑いながらそう話す小平先生だが、その背後には時折、強くしなやかな一本の芯が見え隠れする。

「いつか振り返ったとき、それまでの積み重ねがでっかいピラミッドになっていたら良いなと思って」。

巨大なピラミッドを建てるには、広い裾野を構成する無数の石が必要だ。だから先生は、これまで自分以降りかかってきた偶然を、妥協せず、受け止め続けてきた。

福島県郡山市の教員一家に生まれる。それまで男子校だった安積高校に、女子一期生として入学。歴史学者・朝河貫一らが出た、独立志向の強い伝統校で、男女に関係なく一個人として、



成長すべきことを学んだ。幼い頃から読書好き。上京して入った早稲田大学第一文学部は、学問と娯楽が一緒になった場所だった。「皆なぜ文学部に入らないんだろう」。そう思ったという。日本文学を専攻し、卒業論文では、日本の探偵小説の変遷を描いた。

先生の興味はいつでも、物事の根底にある。日本の社会構造を知るために、企業の採用広告などを制作する、株式会社揚羽に就職。景気が悪くなれば、広告は減る。社会の流れが一番良く見えるのは、広告業界だという直感があつた。

ベンチャー企業のため、提案・企画・人選など、全ての工程に携わる。入念に準備すれば受注率は上がり、頑張ればそれだけ良いものが出来る。逆に何か一つでも妥協すると、思わぬところでボロが出るという。ピラミッドの一番下が、どれだけ大切かを実感した。

根底への眼差しは、ときに大きな飛躍を生む。研修で新人を教えるしていく中で、自分の意見を言えない新人社員が増えていることに、危機感を覚えた。

根本的な原因の一つに、教育の問題があるのではないかと。現状を知るためには、教員にならう。転職への決意は、こうして固まった。しかし、根底の追求は、そこで終わらなかつた。教壇に立つ前に、ピラミッドの石を、もつと集めておく必要がある。根底の根底を求めて、大学院に入った。

妥協しなければ、自分が選択した道は、必ず正解になる。それが先生の流儀だ。

写真は、小池圭一さんに撮影していただきました。記して感謝申し上げます。

(担当…三浦・井畔)

**音楽と小林秀雄**  
中高の部活動は吹奏楽(コントラバス)。父親の本棚にあった小林の評論『モーツァルト』を読み、音楽が鋭く言語化されていることに衝撃を受けた。

背景画像：Francis Frith『The Great Pyramid and The Great Sphinx』(1858年)、メトロポリタン美術館(パブリックドメイン)。

『M』編集部会メンバー

○ 林田 ちづえ	2011年卒	● 高橋 凌士	2011年卒
● 三浦 直人	2011年卒	○ 朝倉 貴紀	2012年卒
○ 土屋 弦	2014年卒	● 岩田 滯夏	2015年卒
● 坂本 駿太	2015年卒	○ 塩出 研史	2015年卒
○ 垣 日菜子	2016年卒	● 高波 茉生	2016年卒
● 井畔杏里紗	2018年卒		

◆「黒幕」は僕でした  
小学生の頃から、プロデューサー気質だった、とお聞きしたのですが、明治高校時代は、どんな生徒でしたか。

当時は男子校で、世代も性別も制服も皆同じ。だから、学校内での自分の立ち位置を考えました。中学では、生徒会長とサッカー部部长をしていたのですが、自分が表に出るのは、正直向いていないなど。明治高校に入って気付いたのが、「黒幕」の楽しさでした。

才能って、何を好きでいられるか、ということだと思ってる。僕の場合は、自分が考えたことで、クラスメイトが笑ってくれることが、何より嬉しかった。一対一で相手を喜ばせるよりも、誰かを使って、たくさんの人を笑わせることが好きなんだ、と気付きました。

◆7年間の妄想  
高校時代、ネタ帳を付けていたとうかがいました。

将来エンタメ業界に入るつもりで、付けていたわけではないのですが、小学校の頃、サッカーの練習後に付けていた日記の延長で続けていました。



当時のネタ帳

この人にこんなことをさせたら面白いかな、今日は何で笑わせようかな。24時間、365日、ずっと考えていたように思います。

男子校だったことも、大きいかもしれません。異性の目を気にすることなく、好き勝手出来たので。先生もコンテンツの一つ。自分の代わりに表に出てくれた皆が、怒られていましたね(笑)。

◆前島先生は神社？  
特に印象に残っている先生は、前島研二先生(体育科)。直接教えていただいたことはないのですが、先生の御宅が自分の実家の近くだったようので、行ききの電車が一緒でした。

大学生になって、一緒にお食事に行く機会があり、「お前は将来何をしたいんだ？」と聞かれたんです。その頃には「エンタメをやりたい」と決めていたので、そう伝えました。それ以来、先生にお会いすると、今考えていることを、言葉にして宣言しています。僕にとつて、神社みたいな存在ですね(笑)。今でも年に2回くらい、お会いしています。僕の人生における大切な出会いの一つです。

今でも、当時のネタ帳を見返すことがあるのですが、「尻尾一人間に尻尾が生えていたら」とか、自分でもよく分からないものもあれば、気付きを与えてくれるものもある。

とある芝居のチケットの販売開始が公演1週間前だったというメモは、後に千原ジュニアさんの40歳ライブのチケットを、開催5年前から発売し続ける、という企画の種になりました。

次のページへ続く

現役中高生には生徒会誌『過程』が、40代以上には総明会会報『紫紺の詩』があります。「オトナの『過程』M」は、そのあいだを「つなぐ」もの——若手OBOGによる、若手OBOGのためのメディア——として発行されています。



# 猿楽町世代の先輩からOGへ **エール!**

明校初のOGが社会に出てから5年。この機会に、男子校時代を経験し、その後、女性の社会進出を実感されている、40~60代の先輩方から、明治女子へエールをいただきました。社会人として頑張るOGや、これから目標に向かっていく後輩へ、どのような声が寄せられたのでしょうか。

(担当：林田・垣・井畔)

## 50代

昭和時代、社会に出る女性の大部分が事務職系の仕事でした。今では、そのような仕事は、女性蔑視と扱われています。その代り、男性と同じようにノルマを与えられ、仕事がきつくなったと思います。大切なのは、根気と勇気をもって仕事を深く学び、大好きになることです。

## 40代

男子校ゆえに余計な回り道をした部分もあったかも知れませんが、それも貴重な財産になっています。今はどんどん自分が成長できる環境が整っていると思います。今周りにいる人と深くつながり、社会でもそれを活かして、臆せずチャレンジしてください。

## 40代

先輩風を吹かせるのは好きではありませんし、あの頃といまとは社会も全く違いますから、偉そうにアドバイス出来ることはありません。明治の名に恥じぬよう社会に対する責任を肝に銘じて自分らしく「前へ！」進んでいってくれば……と思います。

## 60代

ガラスの下駄をはいていることに無自覚な男性も多く、公私ともに要求されることが多い女性は大変な時代だと思います。それでも、女性は変える力を持っています。皆様の素敵な未来をお祈りするとともに、明高生らしく、物事を損得で判断しない「素敵なバカ」でいてほしいです。

## 50代

自分が入社した頃、男女雇用機会均等法が施行され、同期に一般職だけではなく、4大卒女子が多数いて、上司がとまどっていました。今は一般職という採用すら死語で女性部長も多数います。目標をもって努力すれば男女の差は全くないかと感じます。

## 40代

男女といったアプローチでモノを考えるのではなく、自分の持つ文化的背景や知見を基に、自信・勇気を持って、「周囲が当たり前だと考えている事」を変えていってほしいと思います。男女を問わず、時期こそ違えど、同じ学び舎で過ごした皆様が、日本・世界を変えていく活躍に期待しています。

## 40代

「家庭も仕事も」とか、無理です。できる人は手抜きがうまい。料理は無理に作らず、お惣菜買ってきてもいいし。常に手料理を求める男なんて、容姿が新田真剣佑だろうが菅田将暉だろうがドロップキックしてください。こういうのが「つまらん男」の代表です。

## 40代

OBもOGも頑張ってもらいたい。とくに今は女性の活躍が日本のさらなる飛躍に必要だと思う。

総明会広報委員会の諸先輩方に、ご協力いただきました。お寄せいただいた熱いメッセージのうち、ごく一部しか掲載できなかったことを、お詫びいたします。なお、文中の表現は、適宜変更・要約させていただきました。

### 編集部よりコメント

先輩方、お忙しい中、ご協力有難うございました。先輩方の人生観や経験などがうかがえる貴重な機会となりました。すでに男女の差が埋まりつつある、というご意見も多くいただきましたが、一方で、#Kutoo運動や#Metoo運動、ハラスメント問題など、社会全体で男女がともに考え、解決しなければならない問題は、まだあるのではないかと感じます。このエールを糧に、今後、男女ともに生きやすい社会を考える参考にさせていただきます。

## Interview 佐藤詳悟 先輩



FIREBUGのオフィス

例えば、僕はロンドンブーツ1号2号の田村淳さんが、何をやりたいかを知っています。でも、淳さん一人では出来ないこともある。それを実現するために必要な人を、淳さんに紹介する。人と人をつなぐのが、僕の仕事です。

今、クリエイター同士をつなぐお仕事をしています。

### ◆趣味は仲介

高大7年間の妄想が、今にながっている。この仕事に就いて気付いたことですが、学生時代からずっと、素振りをしていったんだ。その回数が、桁違いだった。

前のページから続く



僕自身は、ごくごく普通な人間だと思っているので、自分自身には、あまり興味がないのですが、才能がある人、面白い人の目標の実現をお手伝いし、その人たち同士をつないで、新たな可能性を広げるのが好きなんです。昔から、よく仲直りの手伝いとかをしていた気がします。仲介が趣味でした。

### ◆デリートボタン付き

普段のお仕事で、何を大切にしていますか。

最近「決める」と「忘れる」が、大事だと思っています。「決める」は、別の可能性を消すことでもありますが、決めないとも動かせない。正解は誰にも分からないので、とにかく決め

て次に進む。これを日々繰り返している気がします。

同時に、都合良く「忘れる」ことも必要。マネージャー時代は、とにかく仕事がハードで、めっちゃくちゃ怒られたり、2週間家に帰れないなんてこともありました。ネガティブな気持ちには、次の日に持ち越すと、さらに辛くなる。だから「今、僕、ナインティナインと飯食ってるじゃん！」とミラーハートを持ち出して、気持ちを転換する。デリートボタンを押すイメージで、うまく「忘れる」訓練もしていたように思います。



オフィス内に掲げられている会社の目標・方針

### ◆本能的に好きなこと

将来のことを考えたり、今の仕事に悩んだりしている後輩に、何を伝えたいですか。

若い頃、個性的だった人も、大人になるにつれて、角が取れて、平たくなってしまいうことが、結構あります。普段から、「ぶっ飛んだ人」を見ていて思うのは、この人たちは、自分が好きなことを、とことん突き詰めているということ。本能的に「これが好きだ！」と思えるものを、大切にしたいなと思います。

エンタメ業界は特に、仕事と趣味が近いところにありますが、人生仕事全てではないし、趣味の比重が大きくなって良い。人生って、本当にあつという間です。今感じていることは、大切にしたい方が多い。やりたいと思ったらやってみる。会いたいと思ったら会いに行ってみる。高校生だから出来ることもあると思うんです。

(担当：林田・三浦)

執筆にあたり、町田知世さん（FIREBUG）のご協力を賜りました。ここに謝意を表する次第です。